

言葉について

——土橋茂樹先生を送る——

中 村 昇

その日、東京は雨だった。二〇〇一年一〇月一日。古今亭志ん朝師匠が亡くなった日だ。あれ以来落語を観たり聴いたりできなくなった。私にとつて、志ん朝さんこそ、「落語」だったからだ。

志ん朝師匠が亡くなって、インターネットで、いろいろ探しているうちに、珠玉のような追悼文に、たまたまであう。タイトルは、「古今亭志ん朝師匠を偲ぶ」。志ん朝さんに対する愛があふれている。誰が書いたんだろうと調べると、何と土橋茂樹とある。これは、心底驚いてしまった。同じ三号館（文学部）八階の住人、哲学専攻のよく知っている同僚の先生ではないか。

本当にいい文章だ。始まりから泣かせる。

落語大好きの人間たちにとつて、二〇〇一年一〇月一日は忘れることのできない日になってしまった。なぜなら、真に落語好きであれば、必然的に志ん朝ファンであるに決まっている、その志ん朝師匠が一〇月一日午前一時五〇分に永遠に帰らぬ人となったのだから。

（『振り向きさまのリアル——哲学・倫理学エッセイ集』知泉書館、二〇二二年、二三五頁、以下『リアル』と略記）

その通り。私も見た久米宏とのテレビでの対談（最後の晩餐）の話もでてくる。あのとき、久米さんが、親父の志ん生さんのことばかり訊くので、ちよつと鼻白んでしまった。私のなかでは、もう志ん朝さんは、破天荒な親父とは、まったくちがうタイプの大名人になっていると思つたからだ。志ん朝さん本人のことを質問するべきじゃないか。失礼だなあ、久米さん。

土橋先生は、それには触れずつぎのように書く。

最後は鰻を食したいですね、と静かに口にしたとき、私らはみんな胸がキュン、目頭がツーンときちまつて参つたはずだ。なぜなら志ん朝ファンならご存知のように、師匠はずつと鰻を断つてきたのだから。

（『リアル』一三六頁）

そうそう、ここで私も涙ぐんだ。亡くなったあと、向こうで好きな鰻をしっかりと食べているんだろうかと思ひ、何度も泣いた。

最後もいい。

私らは文字通り、志ん朝で落語を知り、志ん朝落語で育つてきたことを誇りにしてきたのだ。一体、これから何を慰めにしたらいいのか。まったく見当もつかない。

（『リアル』二四〇頁）

何度読んでも泣ける。何度も読んでいると、ふとこの文章は、自分（私＝中村）が書いたんじゃないかと錯覚してしまふくらいだ。志ん朝師匠が好きな人間には、たまらない。

さて、志ん朝師匠が定年を迎えるわけではない。本年度でご退職されるのは、土橋先生だ。話を戻そう。一緒に哲

学専攻の専任になったのが、二十五年前。土橋先生と私は、同期である。もう四半世紀を、「ここ」でともに過ごしたことになる。いやはや感無量だ。しかも同じ落語好き。

ただ同じ落語好きとはいっても、土橋先生は、とうとうと語り着実に笑いをとる芸風。私は単発のギャグですべりつづける迷路型(?)で、ずいぶんちがう。何といっても、それぞれの専門が、アリストテレスとウイトゲンシユタインだから、しょうがない。

今回の文章は、土橋先生の著書をしつかり読みこみ、ちゃんとしたことを書くつもりではいた。その準備も結構したのだが……。でも、もうこんな始まり方では、そんな野暮なことはできないだろう。

興味のあるところ(「言葉」について)だけに焦点を当て、勝手なことを書いていこうと思う。(誰に対して言っているのかわからないけれど)どうかご寛恕ください。

たとえば、茅根知子という人の句集『眠るまで』についての文章がある。そのあたりから入っていこう。

そもそも人が言葉を発するということは、私が誰かに言葉を語りかけているということであると同時に、その言葉をほかならぬ『わたし』に向けて誰かが語りかけている、そういう言葉としてまずもって私が聞くことでもあるのだと思う。語りかけている私と、語りかけられている『わたし』は、このとき、互いに他者として向き合っている。言葉を語る私の中には、その言葉の発語がまずもってそこへと宛てられている最初の他者としての『わたし』が、ちょうどバレーボールの「一人時間差」みたいに、私の中で一人二役の身振りによって、語るそのたびごとに決して超えることのできない溝によって切り出されているのだ。

(『リアル』二一八〇頁)

とても面白い見方だ。こうした「一人時間差的言語ゲーム」(二八一頁)は、散文という形態の特徴だと土橋先生はいう。それに対して、詩や俳句は、つぎのようなものだ。

私は誰に向かって話しているわけでもない、ということであると同時に、話している私の自己同一も決して得られない、言い換えれば、主観は内部に決して焦点を結ばず消失する、ということでもある。つまり、言葉が発せられるにも関わらず、それは私からでも誰からでもなく、また同時に《わたし》へでも誰へでもない仕方であらう。たかも言葉だけが自律してそこに《もの》のようにして生じ、存在するようになる、ということなのではないか。

（『リアル』二八二頁）

なるほど。散文と韻文（詩や俳句）のちがいが、ともはつきりと指摘されている。散文の場合は、「私」と《わたし》という一人二役が、言葉のやりとりをすることによって意味が生成され、そこに理解が生じるのに対して、韻文の場合は、一人二役の「主観」などは一切介在せず、言葉だけの自律世界が生成しているだけ、というわけだ。とても説得力のある考えだと思う。

ところが、それに対して、土橋先生も、何気なく読み始めて「すっかり夢中になってしまった」（『リアル』二八八頁）と書いていらつしやる荒川洋治の『詩とことば』では、ちよつとちがったことが書いてある。

個人が体験したことは、散文で人に伝えることができる。その点、散文はきわめて優秀なものである。だが散文は多くの人に伝わることを目的にするので、個人が感じたこと、思ったことを、捨ててしまうこともある。（中略）詩のことは、個人の思いを、個人のことばで伝えることを応援し、支持する。その人の感じること、思うこと、体験したこと。それがどんなにわかりにくいことばで表されていても、詩は、それでいい、そのままいいいと、その人にささやくのだ。（『詩とことば』岩波現代文庫、二〇二二年、一三二頁、以下『詩』と略記）

荒川は、散文は、個人的なものではなく、詩（韻文）こそ個人の思いを伝えるのだという。これは、どういうことだろうか。荒川は、こういう例をだす。

白い屋根の家が、何軒か、並んでいる。

というのは散文。詩は、それと同じ情景を書きとめるとき、「白が、いくつか」と書いたりする。そういう乱暴なことをする。(中略) 実は「何軒かの家だ。屋根、白い」あるいは「家だ。白い！」との知覚をしたのに、散文を書くために、多くの人に伝わりやすい順序に組み替えていることもあるはずだ。(『詩』四四頁)

つまり、われわれが知覚したものをそのまま表現するのが詩であり、それを説明するために、さらに「操作、創作」(『詩』四四頁) するのが散文なのだ。こういう荒川の考えと土橋先生の考えとは、どちらがうのだからか。あるいは、同じなのか。

土橋先生の散文観で面白いのは、私が誰かに言葉を語りかけるとき、その言葉がどこからきたのかが書いていないところだ。「誰かが語りかけている」(『リアル』二八〇頁) という。その「誰か」が誰なのか、書かれていない。これはとても面白いし、実際の事態もその通りだと思う。

土橋先生の言われる「一人時間差」は、言語ゲームのなかで、いつもすでにおこっている。われわれは、いつの間にか「一人時間差」に参加している。ところが、詩や俳句では、その「一人時間差」などは歯牙にもかけず、自律した言葉そのものが、いきなり生成する。われわれのあり方とは無関係の《もの》が、いきなり現れるというわけだ。となると、こういうことではないのか。言葉は、どこからともなく、誰からともなく、こちらにやってくる。あたかも「無」から何かが現成してくるように。そして、「一人時間差」の言語ゲームが始まり、散文が生成される。それによって、それなりの意味が決まってくる。「私」と《わたし》の複数性によって、多くの人に伝わるのが可能なものになっていく。

しかし多方で、定型や韻文といった制約がある場合には、言葉は《もの》としてゴロッと投げだされ、それにわれわれは手がだせない。自律した言葉そのものの世界が、《もの》としてそのまま現れているからだ。

このように考えると、土橋先生の散文についての考えは、荒川洋治とさほどかわらないことになるだろう。「一人

時間差的言語ゲーム」によって、「他者」に伝わるための「操作、創作」がなされると考えられるからだ。

それでは、韻文についての考えは、どうだろうか。

荒川は、詩は、個別の感情や体験を直接表すものだという。ここで、土橋先生と荒川洋治は、はつきりと袂を分かつたろう。そして、私も、荒川と袂を分かつことになる。荒川は、詩人であるにもかかわらず（いや、詩人だから、といったほうがいいかもしれない）、言葉の根源的な「他者性」に無頓着だ。詩人は言葉の達人だ。だからこそ言葉の操作や創作の本質を取り逃がしている。言葉の操作や創作のプロだから、自分自身の足下が見えていない。言葉がわれわれの都合とはかわりなく、いきなり現れる「他者」だということに気づいていないのだ。だからこそ、言葉によって、自分の感情や体験をそのまま表現できると思いこんでいる。……

といったようなことを、土橋先生の本格的な諸論文とからめて論じようと思っていたのだが。とくに『善く生きることの地平——プラトン・アリストテレス哲学論集』（知泉書館、二〇一六年）所収の「ロゴスとヌースをめぐる一試論——アリストテレス『魂について』に即して」や『教父と哲学——ギリシア教父哲学論集』（知泉書館、二〇一九年）所収の「光の超越性と遍在性——初期ギリシア教父における光とロゴスをめぐって」を参照しつつ。あるいは、後者の論文の秀逸な解説にもなっている『教父哲学で読み解くキリスト教——キリストの生い立ちをめぐる3つの問い』（教文館）の第一章「なぜイエス・キリストは『御言葉』と呼ばれるのか?」を縦横に（！）使って。

ところが、こんな中途半端なものになってしまった。ほんとにおおはずかしい。いやいや、駄弁を弄するのは、もうこれくらいにしておこう。

志ん朝さんの享年を、土橋先生も私も越えてしまいました。言葉がありません。

土橋先生が、これからもまだまだ研究・執筆をつづけられることを心から祈念しています。
どうかお元気で。